

---

# IS ～理不尽と現実と秩序を司る者～

釋廉慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 〜理不尽と現実と秩序を司る者〜

### 【Nコード】

N4115BA

### 【作者名】

釋廉慎

### 【あらすじ】

ちよつと『普通』じゃない人生を歩んだ男は事故で命を落とす。あの世で転生を勧められて断ったのに『暇潰し』で転生だあ?!しかも『IS』?!……何それ?

所謂テンプレですが主人公はオタクではなくISも知りません。作者は知ってますが。

これは作者の妄想の産物であり『IS00』と並行して更新していきます。

## ブローグ1（前書き）

オタクじゃないキャラにはネタがぶちこめない（汗）

## プロローグ1

インフィニット・ストラトス（Infinite Stratos）

通称『IS』。今から10年前に宇宙探査用マルチパワードスーツとして開発されたソレは、その有り余る性能から全ての現行兵器を上回る“最強”の“矛”と“盾”という名の“抑止力”として世界に広まった。

だがISには一つの欠陥があった。それは男性には起動出来ず、女性にしか使えない事。

ISの開発者本人さえその理由を明らかにしていないその欠陥は、男尊女卑の世界を終焉に導き、そして女尊男卑の世界を生み出した。

これは、この世界に生まれ落ちた“偶然”と“必然”の物語。

「ふんふんふんふん」

薄暗い、そして無駄に広い、窓の無い空間。周囲は様々な金属部品や機器や配線に埋もれ、灯りすら点けられていないその空間を機器の画面の光が照らしている。

その中で数ある画面の一つと向き合う一人の二十代前半とおぼしき女性。

メカニカルなウサミミを着け、着ているブラウスはサイズが合っておらず胸元がパンパンに膨らみ布の隙間からは妖艶な大人の肌色が覗いている。

その奇妙な服装を喻えるならば、『一人不思議の国のアリス』と言った所だろうか。

女性はその白魚の様に細い指をキーボードの上に躍らせる。その動きはそういう運命だったかの様に、一切の迷いも無く、滑らかに滑っていく。

この女性の名は、『篠ノ之 束』と言う。何を隠そう、自他共に認める天才にしてISをたった一人で一から造り上げた張本人である。ご機嫌な鼻歌を歌う彼女が何故ISを造り、世界を一度創り変えたのか知る者はいない。寧ろ本人がそれを憶えているのか怪しい節もある。

彼女のテンションは先程から上がりっぱなしだった。何故なら後少しで彼女が待ちに待ったあの時間だからだ。

三年前までは微塵にも興味を示さなかったものだが、『彼』がやってきて全てが変わった。

彼女は自分が興味を抱かないものには徹底的に関わろうとしない。

それは現象物果てには人間問わずだ。

『彼』も初め興味を余り抱かないものの一つだったが、接しているうちに少しずつ変わっていった。彼女が待ち望んでいるものもその一つだ。

その時間はすぐに訪れようとしている。こことは別の部屋からそれが差し迫っている証拠が既にやってきているからだ。

そして遂にその時間は来た。

『東さん、晩ご飯ですよ〜』

「わっふ〜〜〜!!」

別の部屋から声がかかると同時にいい大人が目の中の事を放り投げ一目散に駆け出すのは中々シニールである。

その時配線の一つに足が引っ掛かって抜けて先程まで入力していたものがパーになったのは別の話。

先程の空間とは打って変わって此処は人の生活感溢れる場所だった。灯りは点けられ、部屋の中央にはテーブルと椅子、壁際には空中投影型テレビとデッキ、その前には大きなソファ。複数の本棚にオーダーディオ。部屋の隅には観葉植物まで置かれている。

「なつくんなつくん、今日の晩ご飯は何かな!？」

機械だらけの部屋　彼女の研究室の一つ　から飛び出して勢いよくこの部屋に入ってきた束は、この部屋の奥にあるダイニングキッチンにいたであろう『彼』に声をかける。

彼女の一日の楽しみの一つ……それは、『彼』が作った料理だった。

「今日はオムライスです」

そう言いつつキッチンから両手に出来たてのオムライスが乗った皿を持って出てきた『なつくん』と呼ばれた青年。

白のワイシャツに黒のジーンズ、水色のエプロンというシンプルな服装に身を纏う彼は此処の同居者の一人であり、家事をしない束に代わり此処の家事の殆どを担うある意味大黒柱である。

青年の容姿はまず目を引くのが日本人には普通あり得ない青み掛かった銀髪。これは彼の生まれに由来するのだが此処では一先ず置いておく。

臀部の辺りまで伸ばしたそれを後頭部で一本に束ね折り返して更に纏め、前髪はやや伸ばしている。

瞳も日本人には無い赤色。これもまた事情があるのだが伏せておく。顔立ちは中性的で、180という高い身長と強くしなやかに鍛えられた肉体はモデルというよりも格闘家というイメージを抱かせる。

彼の名は『月詠　永人』。れっきとした18歳の日本人だ。

「取り敢えず手を洗ってきて下さい。くーちゃん、スープお願い」

「おっけいなっくん！」

「はい、永人様」

「だから様はやめてと……。そんな風に呼ばれる人間じゃないのに……」

彼に続く様にキッチンから野菜スープレの器が乗った御盆を持って出て来たのは『くーちゃん』と呼ばれた小柄で華奢な少女。

永人とは違う純粋な銀色の髪を三つ編みで一本に纏めている。

十二そこらの少女は目を閉じたままテーブルへとスープを運ぶ。彼女には『見えない』事など関係ないのだ。

彼女は永人と束の事を様付けで呼ぶのは、彼女にとって二人が全てであり己の命よりも重い存在だからである。

「くーちゃんも私の事ママと読んでくれていいんだよ？そうすればなっくんはパパだね……」

「気持ちだけ貰っておきます」

「ぶー、堅いなあなっくんは。でも束さんはそんななっくんにはハートをゲイ・ボルグされたんだけどね！」



「東さん、それ死んでるから」

ケルト神話に登場する必殺の呪いの魔槍で心臓を突かれれば即死ものだ。

配膳を終えた二人と手を洗ってきた一人は各々椅子に座り、手を合わせて食前の言葉を唱えた。

「いただきます」

「うん、今日もなっくんの料理は美味しいね！」

「はい……」

「ならよかった」

スプーンにすくったチキンライスとデミグラスソースがかかった半熟の薄焼き卵を口に運びながら絶賛する東とそれに頷くくーちゃん。二人の好物は言わずもがな永人が作った料理である。

今日のオムライスは永人の自信作であった。チキンライスにはケチヤップではなく裏ごしした特濃トマトソースを使い、よく炒めた玉葱で甘味を加え岩塩とブラックペッパーで味を調えている。

野菜スープは大根や人参、玉葱を具に固形コンソメと隠し味と風味付けに白出汁を加えている。

永人がここまで料理が達者なのは東が家事不精であるのもあるし単純に彼自身が料理が好きというのもある。料理は彼の数少ない趣味の一つだ。

また永人がいない時はくーちゃんが作る事になっているので、くーちゃんは永人から料理を習っており並程度の物なら作れる様になった。

『続いてのニュースです。先月、世界で初めて見つかったISを使える『男性』である『織斑一夏』君について、国際IS管理委員会と日本政府は織斑一夏を『IS学園』に入学させる事を本日発表致しました』

備え付けのテレビの画面の中で、ニュースキャスターが原稿を読み上げていく。

その内容は、世界で『初めて』とされる、本来なら女性にしか使えないはずのISを起動出来る男性が見つかったという世界を揺るがせた珍事に関するニュースである。

「……いよいよだね」

「ええ、もう戻る事は出来ません」

「『コスモス』の調整は万全だよ」

「俺も準備が済み次第日本に飛びます」

「だけど……大丈夫？あそこには君の……」

束の問い掛けに永人は哀しそうな顔をしながら苦笑を浮かべる。『あそこ』には彼の過去に関わるものがあるからだ。

「……大丈夫ですよ。俺は『月詠 永人』なんです。この世界に生まれた時からそうなんですよ」

「なつくんは……なつくんだよ。それ以上でもそれ以外でもない、一人の男の子だから」

「……有難うございます」

「うつん、寧ろ私がお礼を言わなくちゃいけないんだから。私の目を醒ましてくれた、私を受け容れてくれた、私を変えてくれたんだから。」

「……ごめんね、もし私に何かあったら君が私を……」

「言わないで下さい」

そのまま言葉を続けようとする束を永人が制する。そしてその顔に

強い眼差しを浮かべながら束を見据えて言った。

「なっくん……」

「俺が、俺とくーちゃんが護りますから。そんな事にならないようにしますから」

「ご、めんね……」

「だから、貴女も護って下さい。護られて下さい。それが、俺達が必要事だから」

俯いて涙を溢す束を永人が後ろから抱き締め、あやす様に頭を撫でる。愛おしく、慈しむ様に。

それに続いてくーちゃんが横から束に抱き付く。

それは慈愛に満ちた家族の様な光景だった。

## プロローグ1（後書き）

暫くプロローグは続きます。

## プロローグ2（前書き）

タイトルのまんまです。プロローグが終わったら設定を投稿しようかと。

## プロフィール2

???? Side

0歳、三人家族の長男として生まれる。

六歳、地元幼稚園を卒園。地元小学校に入学。

十二歳、小学校を卒業し地元中学校に進学。

十五歳、中学校卒業後隣町の中堅県立高校に進学。

十八歳、高校卒業。某M県T大に進学。

二十四歳、大学博士課程卒業後某大手食品開発会社に就職。

これを見てどう思う？殆どの人間はありふれた人生だと思うだろう。だがしかし、こんな経歴でも俺の人生は『普通』じゃなかった。

上記の通り、俺は三人家族の長男として生まれた。だがこの時点で『普通』じゃなかった。

近所から謙虚で優しいと言われた親父は大の武術オタクで親父自身が古流武術の継承者であり、近所からべっぴんさんだと言われたお袋は実は昔名の売れた元傭兵だった。

なんでも出会ったのはアフリカの内戦地帯であり、武者修業に出ていた親父は戦場でナイフ一本で大の男一人を切り伏せたお袋に一目惚れしたらしく、銃弾飛び交う激戦区の中でプロポーズしたとか。

……何処の映画だよ。

そんな二人の間に生まれた俺は、当然扱かれた。

親父には子供の頃から生きるか死ぬかのギリギリで鍛えられたつつ内臓を鍛える為だとかいつて漢方やら薬膳料理を食わされた。

ある程度身体が出来てきて、技もそれなりに覚えたら親父の知り合いだと言う色んな流派や国籍の違う武術の師範の元に送り出され扱かれた。

お袋にはナイフの使い方や軍隊式サブミッション、素手でナイフや拳銃を持った相手を押さえる方法などを叩き込まれた。

結果、生まれてこの方いじめられた経験はなく。

強引なナンパやカツアゲをしているチンピラから被害者達を善意で助けていたらいつのまにかチンピラに狙われ、そしてチンピラから不良集団へ、不良集団から暴走族へ、暴走族からヤの付く自営業へと相手がシフトしていき。

正当防衛でのしていつたらいつの間にか地元の裏ボス的な存在になつてました。……あるえ？

両親には『若さ』だと笑わたが。

新しい環境を求め俺は少し遠い大学に進学し。博士課程を終えて就職した。

大学に通っている間は親父の言い付け通り身体は鍛えていた。あの二人の血を受け継いでいる所為か元々身体を動かすのは好きだし、己や周りの身を護る為や己を律する意味もある。



『確かに武術はかつて戦場で生まれ、敵を殺す為に発展してきた。だがそれは過去の姿であって、今は違う。争いを望まれぬ世界だからこそ、護る為に武術は存在すべきだ。

力を手にして尚、その力に溺れず道を踏み外さず人間として力を振るえ』

これが、親父の口癖であり俺が好きな言葉でもある。

だが俺の最後は呆気ないものだった。

就職して数年が経ち、いつも通り通勤途中駅のホームで電車を待っている時のことだ。俺から少し離れた所にいた男性が、突然ホームから線路にむかって身投げしたのだ。

その時ホームには通過列車が向かってきており、自殺だったのだろう、俺は駆け出して男性の襟を掴みこっちに引っ張り上げたのだが、焦っていたのか逆に自分が線路に落ちてしまい、地面に着く前に電車に挽かれて死んだ。

では何故俺が自分の死んだ時の話をこうやって出来るのか。それは今俺の目の前で起きている事に由来する。

「大変、すまなかった」

俺の目の前で深々と頭を下げる一人の老人。白い道士の様な服を来ており仙人をイメージさせる。

この老人と俺のいる世界は、ただ白い。床とか、壁とか天井とかそういうのが一切なくただ真っ白な空間が続いている。

この老人は自分を『神』だと言った。何教や何神話の神様だが知らんが、取り敢えずそれなりに偉いらしい。

そして俺が此処にいる経緯も聞いた。何でも、本来ならば俺の事故死はこの世界全ての出来事やこれから起こる事を記されたアカシツク・レコードにすら記載されていなかったらしい。

つまり“本来なら有り得ぬ死”であり、お詫びとして元の世界以外の世界に転生させてやろうと言うのだ。

「だけど……まあいいや」

「フオツ！？なんでじゃ！？」

「いやさ、確かに未練が無いとかは嘘だけど俺はこうして死んじやった訳だしさ。アカシツク・レコードとか知らんけどそういう“ご縁”だっただけで自分でも『普通』じゃない人生を歩んできたと思うけど無理に生き返りたいとは思わない。

それに生き返らせるならさ、俺なんかより飢餓とか病気とか理不尽な理由で満足に『生』を満喫出来なかった子供達をそうしてやってくれ」

「……つまりはお主は転生しないと？」

「生きている以上いずれ死ぬんだ。それが今というだけだよ」

「……そうか。そこまで言うんだったらそうするでしょう」

その言葉を最後に俺の意識は遠退いていく。その果てにあるのが何

なのか……今はそれを知る事が出来ない。

## 神Side

ふむ……中々変わった奴じゃのう。今までの輩はチート能力だの漫画やアニメの世界だの煩く注文してきたが……。  
あ奴の経歴を見る限り悪人でもないし無欲というよりは達観しているのじゃろうな。

……あ奴が生きていたらどんな人生を歩むのか……見てみたいのう。  
ふむ、暇潰しも兼ねて転生させてみるか。あ奴には悪いが、わしからの細やかなプレゼントじゃ。

そうなの……世界は『IS』でいいかの。

## キャラ&IS設定(前書き)

急遽予定変更。設定投下しちゃいます。

チートかもしれないけど……自重するよ？

## キャラ&IS設定

### 本編オリジナルキャラ

つくよみ  
・月詠 永人 ながと

本編の主人公。原作開始時18歳。世間では『世界で二番目にISを使える男』と呼ばれる。

転生者であり、とある経緯で死亡するが本来ならアカシック・レコードにも載っていない予定外の死の為『神』と名乗る人物から転生を勧められる。

しかしそれを蹴ってそのまま死後の裁判を受け入れるつもり……だったのだが『神』がそれに興味を持ち『暇潰し』として“IS”の世界へ無理矢理転生させられた。

多分これからも『暇潰し』として色んな世界に飛ばされる……かもしれない。

前世での経験と記憶を引き継いでいるが、別にオタクでもないしアニメ漫画知識にはどちらかというと疎いく『IS』も知らない。寧ろ前世での生い立ちから武術に詳しい（詳しくは本編より）。

IS世界ではとある特殊な家系に生まれ……らしいのだが、本人はそれを篠ノ之束や一部の人間を除きひた隠しにしている。

とある事情でISを起動し、束と出会う。

束の生活の酷さもありそのまま半ば強引にラボに家政夫として住み

込む。初め束は無視を決め込んでいたが、どんなに突き放しても決して引かない態度とISの研究にアイデアを出した事から次第に興味を持ちはじめ、いつの間にか惚れ込み『妻』を自称する様に。だが永人は鈍感であったのだった（笑）

それからIS研究も手伝うようになり、そして実際にISを使って違法研究施設の破壊などを行う。方針は『不殺』。

そして原作主人公である織斑一夏がISを動かしIS学園に入学すると同時に護衛として入学した。

永人の方が先に動かしただが、世間では一夏が『男性初』とされている。

身長は180cmで容姿は中性的。脚の付け根まで伸ばした青み掛かった銀髪を後頭部で一本に束ねうなじの辺りで折り返してさらに纏めている（マンキンの『道 潤』や『道 蓮（大人）』のイメージ）。

元々はショートシャギーだったが束に伸びた髪を切るのを止められた為伸ばしている。

瞳の色は赤で、束特性の治癒力強化ナノマシンの副作用……らしい。

前世の記憶を頼りに身体を鍛えており細マッチョで身体能力に優れる。

人の感情や物事の変化には敏感だが、自分の恋愛事は疎い。これは前世で彼女が出来なかった経験もあるし、とある理由から無意識のうちに必要以上の接触を避けているもある。

両手に白のノーフィンガーグローブを嵌めており、左がISの待機状態。右が束特性収納グローブである。

これはISの量子変換機能を基に造った収納システムでペンライトや盗聴器、非常食の他ハンドガンや束特性脇差や束特性スナイパー

ライフル、スタングレネードや手榴弾など色々入っている。とにかく色々入っている。

ISスーツは白のプロテクターが付いた黒の全身スーツ。防刃防弾仕様。ぶつちやけマブラヴオルタの衛士強化装備（日本帝国斯衛白仕様）。

## オリジナルIS

### ・第四世代機『コスモス』

永人専用のIS。元は違法研究施設で研究されていた機体だが、そこに居合わせた永人の想いに応えて起動した。以来永人にしか起動出来ず、また永人もこの機体以外の起動も出来ない。

装甲や装備は束の手で一新され、全てのISを御するという意味でギリシャ語の『秩序（KOS・MOS）』と花の『秋桜（COSMOS）』を掛けて名付けられた。その為全てのISコアや電子機器の掌握と制御を可能とする特殊システムが搭載されており、対ISそして束が己自身へのカウンターとして造り上げた。

装甲色は薄く青み掛かった白に所々金と黒の縁取りが入っている。元々は黒だったがIS学園への入学に合わせまた黒い状態で破壊活動を行っていたので装甲表面のナノマシンの発色パターンを変えた。黒に戻す事も出来る。

センサーやエネルギーカラー（原作表紙のマニピレーターとかのアレ）は藤色。

猫耳っぽくて額に円形特殊センサーの付いたヘッドギアを装備、また性別を隠す為に胸部や腰回りを装甲で隠している。

『ゼノ・サーガ』シリーズに登場する人型戦闘アンドロイド『KOS-MOS（ver.4）』がイメージ元ネタだが永人はゼノ・サーガを知りませんので作者の陰謀という名の偶然です。

両肩に非固定浮遊式の物理シールドを装備。これ自身スラスターでもありまたとある兵装の制御ユニットも内蔵している。

多方向加速推進翼を左右二対、計四基装備。これには試験的に機動特化型展開装甲が採用されており、後に紅椿にそのデータが活用される事になる。

分類的には機動特化型の第四世代機で、白式よりも先に造られた。

武装や装甲下にバッテリーを備えており、燃費の改善を図っている。これは永人のアイデアの一つ。

特殊装備『???』

束が造り上げた対ISシステム。前述したシステムで、もし何らかの事情でISが悪用または暴走した際の切り札として扱われる。

## 武装一覧

レーザーハンドガン『戦乙女』



左大腿部の装甲に格納されたバッテリー式のレーザーハンドガン。

#### 近接ミドルブレード『羅喉・計都』

読みは『らこう』と『けいと』。日本刀の一種である脇差を基に造られた。

バッテリーを内蔵し刀身に高圧電流を流せ、奥義『演舞迅雷刀八本』を放つ。

#### 36mm超電磁投射式機関砲『迅雷』

内蔵バッテリーにより弾丸をフレミングの左手の法則で音速の数倍で撃ち出す。出力調整で威力重視の高出力モードと低出力の連射モードがある。

元ネタはKOS-MOSの『スマートマシンガン』とガンダム00のフラッグの『リニアライフル』。

#### 60mm三連装ガトリング『火雨』

読みは『ひさめ』。上部グリップ式の三連回転式バルカン砲。下部に大型マガジンを備える。二挺装備。元ネタは同上の『ハンドバルカン』。

#### 可変型ビームカノン『龍顎』

読みは『りゅうあぎと』。展開装甲の前身である可変型ビームカノ

ンであり、龍の頭部を模したこれの口の部分からビームを射出、顎を上下に開きビーム刀を形成する。  
元ネタは同上の『ドラゴントウース』。

### 120mm多段式カノン『軻遇突智』

両手で支える重量大型砲。

砲身に複数の水素式炸裂機構を仕込む事で撃ち出した砲弾を砲身の内部の爆発によって更に加速させる。

反動が大きく砲後部の水素タンクの残量が尽きると普通のカノン砲と変わらなくなる。

第二世代機最強装備と謂われる六九口径パイルバンカー『灰色の鱗<sup>グレー</sup>スケール<sup>スケール</sup>』に続く威力を誇る。

### 八連装マルチミサイルポッド『萤火』

非固定浮遊展開式ミサイルポッド。普段は量子変換で収納されている。装填は量子変換式で様々な弾頭を選択出来る。左右一対装備。

『???』

コスモス最強最終武装。その威力と特性から相手と場所を選ぶ為普段は封印されている。……使う相手いるかなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4115ba/>

---

IS ～理不尽と現実と秩序を司る者～

2012年1月10日23時49分発行